第二部　各論

世越号沈没事故と死の表象の疫学
――韓国社会における「死ぬこと」の意味について

李 窓益
李 芙鏞［訳］

一　沈黙――「動かないでください」

私もやはり死ぬのではないか。私はエンキドと違うのか。
悲しみが私の心に染み込む。
私は死ぬのが恐ろしい。[1]

二〇一四年四月一六日の午前八時四八分、全羅南道珍島郡鳥島面の海上で、仁川から済州島に向かっていた大型旅客船の世越号（セウォル号）が沈没し始めた。午前一〇時三一分、世越号はひっくり返り完全に転覆し、午前一一時一八分には船首の三〇メートルぐらいだけを残して完全に沈没した。そして四月一八日の午前一一時五〇分、残っていた船首まで沈み、世越号の船体の全てが水に浸った。二日間にわたるこの沈没過程は、テ

レビの画面を通じて生中継された。皮肉にも、三日三晩をかけて故人を見送る韓国の葬儀のように、事故から三日目に船は完全に沈没した。それまで人々は、少なくとも何人かは生きて帰ってくるかもしれない、という微かな希望を抱いていたようである。ところが、船首までが目の前から消えてしまうと、人々は二日間、空しい希望を抱いていたことに気付き始めた。沈没が進むと、エアポケットに関する話が持ち出された。沈んだ船にエアポケットが形成されると、人は海の中でも三日間は生きていられる、という主張であった。しかし、エアポケットという「人間の浮き袋」は存在しなかった。

そして、その三日が経過すると、人々は沈黙し始めた。生存の希望が全て消えてしまったのである。しかし、誰もすぐに「安否不明者の全員の死」については言えなかった。遺族も政府も国民も、既定事実になった「沈んだ人たちの死」について言えなかった。なぜだろう。なぜ、客観的に話せる「失われた希望」について誰もが言えなかったのであろうか。その後にも長い間、「生存の神話」は人々の脳裏から消えなかった。人々は依然として悼むには早すぎると言い、直ちに悼むこともできなかった。皆が依然として「生きて帰って」という言葉だけを呪文のように繰り返したが、実は誰もがみずからの言葉を信じなかった。マスコミも「安否不明者の救助」という言葉を「溺死体の捜索」という言葉に言い換えることはできなかった。なぜだろう。まるで皆が皆に対して「死」という最初の発言をなすりつけるようであった。水中ではずっと前に起きたはずの死が、地上の人々は皆「生存の神話」を唱えながらずっと死を先延ばしにさせた。全国民が「空気読みゲーム」をしているようであった。

この甚大な事故を受け入れることには、皆に相当の時間が必要であったようである。たった一人の安否不明者も救助できなかった国家は非難を受け、そのような国家を作った国民は計り知れない罪悪感に苛まれた。特に修学旅行中の数百人の高校生が、船と共に「水葬」されてしまった事実は、全国民に強いトラウマを残した。

まだ成人していない学生たちの死は、あまりにも痛ましかった。沈没する船の中で「助けてください！」と叫びながら遭難を通報する学生に、海洋警察はマニュアル通りに船の緯度と経度を聞くだけであった。マニュアルが求める正解を知るはずのない学生は、結局溺死するしかなかった。船が大きく傾いていた八時五六分、沈没する船で撮影された動画で学生たちは「私たち、本当にここまで傾いている、本当にね……出て行った人は助かると聞いたんだけど……」というが、世越号の乗務員たちは「船内の今の場所から動かないでください」という案内放送だけ出した。脱出をためらっていた学生たちに対し、動かずにそのままじっとしていて、と言ったのだ。そして、生と死とが行き来する危機の瞬間に、学生たちは「動かないでください」という指示に従ってしまった。午前九時三八分頃に撮影された動画でも、学生たちは「助けて」を叫びながら「(私たちはきっと) 救助される」といいながら希望を捨てなかったが、この頃、乗務員たちはすでに船から脱出していた。

携帯電話に残っていた映像や写真が公開されるにつれ、世越号の沈没は次第に「災難」と見なされなくなった。救助できる機会が幾度もあり、また脱出させる時間があったにもかかわらず、結局、若い学生たちを水中に「生き埋め」にしてしまったという認識が支配的になった。沈没当時のカカオトークのメッセージを見ると、教師たちも学生たちに「じっとしていて」というメッセージを送り、学生たちは死ぬかもしれないという事実に気付いていく。学生たちは、今までの過ちについて謝り合い、許しを求め、愛しているという言葉を残す。午前一〇時一一分に撮った写真を見ると、学生たちは一時間二〇分間もずっと船室で救助を待っている。午前一〇時一七分に作成された最後のカカオトークのメッセージには、次のように書かれている。「待って、って。待って、という放送の次に、ほかの案内放送は何もない。」そして一〇時二一分、世越号は完全に転覆した。

人々は、船が完全に沈没する直前まで学生たちが「地上へ送った最後の手紙」を読みながら、絶句した。世越号の乗客たちは「待っていてください」という言葉を信じ、船から脱出できる「ゴールデン・タイム」を逃

してしまった。このような過程を見つめながら、人々は、生と死の境目にいた学生たちがスピーカで流れてくるアナウンスにそこまで従ったという事実に驚愕した。世越号の事件を通じて、私たちは「生と死の距離」があまりにも近いという事実を実感した。死は別の所にあるわけではなかった。私たちが学校で教える「秩序」と「信頼」と「従順」の中に、死があった。私たちが国家と社会の核心であると宣伝してきた全ての価値が、死と同義語であった。無秩序、不信、反逆について教えなかったことを嘆くしかなかった。この時から、人々は「忘れません」「ごめんなさい」という言葉だけを繰り返し始めた。これ以上の言葉は許容されず、ほかの言葉を見つけることもできなかった。まるで全てのことが過去の事件に対する「忘却」から始まったようであった。「記憶の責務」と「罪悪感の苦痛」のみ残った。

四月一六日の午後一時一九分に、中央災難安全対策本部は「三六八名の救助、二名の死亡」と発表したが、午後二時三〇分に「二九〇人の安否不明」と再発表して、全国民をパニック状態に落とした。この時からテレビの画面の片隅では救助者、死亡者、安否不明者の数字が、ゼロサム・ゲームを始め続けた。しかし、実際、救助者はいなかった。事故の最初の瞬間に船から出てきた脱出者がいるのみであった。それでも、テレビの画面は「救助者〇人」ということを決して記すことができなかった。なぜだろう。二〇一四年一一月一一日、七ヶ月間に及んだ安否不明者の捜索作業が中止となった。二〇一四年一二月現在、乗客四七六名中、合計二九五名の死亡が確認され、九名はまだ安否不明である。この統計に含まれていない「存在しない乗客」がいたかもしれないという恐怖は、まだ人々の心のどこかに残っている。世越号には、修学旅行に行く京畿道安山市の壇園高校二年生三二五名、教師一四名、そして一〇四名の一般乗客が乗船し、このうち、学生二五〇名、教師一一名、一般人三三名、乗務員一〇名、合計三〇四名が死亡した。

三〇四名の生命を奪った旅客船沈没事故は、直ちに「四・一六」と呼ばれるようになった。四月一六日は毎

年反復されるけれども、韓国史上同じ日に発生したどの事件も世越号の重みには耐えない。世越号の沈没は瞬く間に「事件」から「象徴」に転換した。あらゆる政治的、社会的、文化的、教育的、宗教的価値は、世越号に吸い込まれ、「沈没」という一つの象徴的価値に収斂された。一隻の船と共に、大韓民国の価値が全部、沈没し始めたわけだ。沈没は世越号の以前から徐々に進行していたように感じられた。ただ誰もその事実が分からなかったのだ。徐々に全てが沈んでいるという総体的危機意識が全国民の肝を冷やし、ぞっとさせていった。国家はいつの間にか、沈没直前の世越号となっていた。いや、世越号の象徴は、社会の全機関、全組織、全列車、全船、全飛行機、全橋脚を覆い始めた。安全なものは何一つもない。全てが薄氷のように、すぐにでも崩壊しそうであった。社会、国家、組織がどれだけに脆いものか、はじめてはっきり分かったのだ。死と無関係のようにみえた全てのものに、徐々に死の影がかかってきた。全ての表象を覆っている生の皮は薄すぎて、小さな傷口だけでその中に潜んでいた「死の表象」がその姿を曝け出していた。

二　記憶――「忘れません」

私の住む都市で人が死ぬ、心が憂鬱になる。
人々が消滅する、心が憂鬱になる。
城壁越しに見た。
川に浮かぶ…… 死体を見た。
同じく私も同様な終末に至るだろう、まさにそうだろう。
私は我が名を掲げたい…… 私は我が名を高らかにしたい。[2]

沈没する前から、世越号はこの世のものでないかのようであった。船の名前「セウォル」が漢字では「世越」（世を越える）であることが分かってから、人々は名前がもたらす「運命の束縛」にくらくらとめまいを感じた。名前の通り、世越号は結局「世を越えた船」になってしまった。世越号はこの世とあの世をつなぐ無数の「想像上の渡し船」の一つになった。神話の世界にだけ存在しそうな「葬礼船」の話が、現実世界に伝送されたかのようであった。船長とほとんどの船員は沈没する前に船の外へ脱出した。だから世越号に閉じ込められた乗客たちは、水夫（かこ）がいない船で、生きたままこの世からあの世に渡るしかなかった。神話は無意味に満ちた現実世界を意味をもって固定させると習ったが、いざ神話が現実になった時、人々はその恐ろしさにおびえた。

おそらく「世越」という名は世の荒波にもまれた人々に、しばらくの間、海上で「救援の休息」を与えるという意味を持つだろう。私たちは常に世の中を越えようとする。だから旅に発つ。旅客船に乗せられ、しばらくの間、世の中と断絶され、済州島に出会った後、また仁川の海の濃い霧をやぶいて、陸の世の中に戻ってくること……。世越号の乗客たちは旅行を通じて、このような「素朴な救援」を願ったのであろう。しかし、世越号は永遠に繰り返される「素朴な救援」の虚しさをあざ笑うかのように、乗客たちを永遠の「他界」に乗せていった。

日本から輸入された世越号は、韓国に来る前に「フェリー波之上」という日本の名前を持っていた。「波之上」という名は、沖縄の波上宮に由来する。この神社は海上交通、豊魚、除厄などに関連する神を奉ると伝えられる。しかしながら、世越号は、結局、「波の上」にだけあることはできなかった。一九九四年に建造された世越号は、一八年間余り日本で運行され、二〇一二年退役した。それを清海鎮海運が買い取って、二〇一三

年三月からは仁川・済州島間を運行していた。

人々は、廃棄されるべきであった世越号の買い取りを許可した李明博（イ・ミョンバク）前政府の新自由主義的な規制緩和政策を批判した。二〇〇九年に海運法施行規則が改定され、進水日から二〇年であった旅客船の船齢が三〇年まで延びたのである。結局、廃船に近い「船の寿命の延長」は、多くの「乗客の寿命の短縮」という危険を前提にしたものであった。機械の生命と人間の生命がそのように交換されたわけである。また、「すでに死んだ船」もお金になるなら死ぬことができない現実、これはまるで病室で延命装置に依存して人間の永遠な「死の遅延」を象徴するようである。人間でも機械でもお金になるなら、死ぬことができない。また、世越号沈没の当時、海洋警察がオンディン（Undine）という救難業者に特権を与えるため、民間潜水士、海軍、UDT、一一九のヘリ、米軍のヘリなどの接近を防ぎ、救助を三〇時間余り遅延させたという事実が明らかになり始めた。二〇一四年一一月一九日、ついに海洋警察は解体される事態に至った。この過程で国民は、危機状況ですら「生命が取引される」残酷な光景を目撃せざるを得なかった。また、青瓦台の代弁人は、二〇一四年五月二四日「民間潜水士は日当一〇〇万ウォン、死体一体の引き揚げに五〇〇万ウォンをもらう条件で働いている」と発言し、波紋が広がった。事件発生から一ヶ月が経ち、政府の口からは「死体の捜索」と「死体の数字」というのが堂々とお金に換算される場面を見ながら、私たちは「私たちの死」について深刻に疑わざるを得なかった。そうして世越号は、韓国社会が隠していた「死の裏面」を徐々に一つ二つ現わしていた。

いずれにせよ、世越号はその名が本来指向したはずの不滅の超越に至ることはできなかった。そして世越号の所属する清海鎮海運の実所有主が、一時期、救援派（キリスト教福音浸礼会）の前首長の兪炳彦（ユ・ビョンオン）であるとの主張がなされ、世越号沈没事故に、次第に宗教的気運が立ちこめられるようになった。救援派とは「救援の一回的な完成」を主張する韓国キリスト界の「異端」であるということ、そして救援派の牧

師であった兪炳彦が三二名の終末論的集団自殺事件で人々に刻印された「五大洋事件」の関連人物であることが報道された。これで世越号に「新宗教の終末論」という象徴的な意味がもう一つ追加された。しかも指名手配中の兪炳彦は二〇一四年七月二二日、全羅南道順天にある別荘付近で腐敗した変死体で発見された。そこで「教主の死」という、もう一つのスキャンダルが世越号事件に結び付けられた。時間が経つにつれ、世越号には数多くの「死の表象」が付け加えられていった。世越号はいつの間にか、「死の表象の塊まり」になってしまったのである。

事件発生からわずか何十日も経っていない時点で、世越号は急速な「象徴化過程」を経た。少なくとも韓国社会において「事実」と「象徴」の合体が、このように迅速に進められたことは今までなかったと思われる。早いにしてもあまりにも早かった。事件が発生してからあまり経っていないし、いまだに死体の収容が進行中の状況で、世越号は、すでに歴史となり象徴となった。瞬く間に世越号以前と以後を分ける「ポスト世越号」時代の神話になってしまった。さらに一部の人々は、事件発生の初期から世越号関連の資料を漏れなく緻密に記録する「アーカイブ作り」を始めた。五月から韓信大学大学院の記録学の専攻者たち、明知大学の記録情報科学専門大学院、安山地域社会協議会の「災難記録団」などが参加し、世越号関連の追慕記録、ＳＮＳ記録、口述記録、映像、写真などを収集し始めた。そして、「世越号を記憶する市民ネットワーク」が作られ、京畿道安山市壇園区古棧洞のある商業ビルの二階には「世越号の記憶貯蔵所一号館」が作られた。[3] その意味を次のように説明している。

アーカイブがちゃんと私たちの目を開けさせる、と信じている。アーカイブは記憶の貯蔵所である。世越号の記憶を一つ残らず刻んでおく場所である。記録による記憶が、私たちの悲しみと革新への意志を永続

させてくれるだろう。原因も、過程も、結論も、全部残すべきだ。学生一人一人の心も、遺族の絶叫も、市民たちの涙も、全部記憶するべきだ……世越号の遺族たちが恐れるのは「忘れられること」である。市民たちもやはり世越号惨事の記憶を忘れないように必死になっている。社会的記憶を形成し、維持する時こそ、世越号のような痛い傷は治癒できる力を持つことができるからだ。[4]

人々は、世越号を忘れないことだけが世越号を救済する方法であると信じているようである。なぜ、そこまで記憶に執着するようになったのだろうか。なぜ、「記憶すること」が世越号の犠牲者たちを「哀悼」するための最も重要な方法になったのだろうか。実際、記憶は人為的に、一方的に形成されない。過去の記憶を復元することは、一定の「回復の技術」を要するかもしれない。しかし、現在、目の前で進行中の事件に対する記憶を、リアルタイムで記録して貯蔵するということは、何か「おかしなこと」である。このような動きは何だか得体の知れない「記憶の強迫観念」を露呈する。一個人は「記憶の集積体」である。そして、その個人の全ての記憶を復元することは不可能である。すなわち、個人はそれ自体で学問的研究の対象にはなれない。だとすれば、世越号事件で記憶の喪失を恐れ、全てを記録しようとする強迫観念は、なぜ生じたのだろうか。事件が発生してから数ヶ月も経っていないのに、なぜ「世越号の記憶貯蔵所」という記憶の空間が早急に作られたのだろうか。

私は、「世越号の記憶貯蔵所」に「記憶で作った墓」を見た。壇園高校の学生たちの遺品、携帯電話、写真、動画、ＳＮＳの記録、あちらこちらに散りばめられた追悼のテキストと行為……これらの全てが「死体のない墓」になっていた。世越号が海の中に沈むやいなや、人々は「記憶の墓」を作り始めた。まるで学生たちの死体が水の中で失った肉体を、イメージとテキストと音で復元しているように。世越号の沈没は、一次的には

「死の事件」である。しかし、誰も死について語ろうとしない。死の原因、死の波及、死の意味に関する話は多くある。しかし、どこにも「死の現象」はない。死が次々に、ほかの何かに翻訳されてしまうからである。

「忘れません」という言葉は、世越号の事件が起きてから最も頻繁に使われた呪文の中の一つであった。忘れないと何が変わるというのだろうか。記憶することが哀悼の唯一の方法であるならば、この哀悼はあまりにも早い哀悼ではないか。昔、人が死ぬと「三年葬」をしたように、死の哀悼には一定の「心喪」の期間が必要である。この心喪の期間は、普通、埋葬以後に訪れる。そして、葬儀を終えた後、徐々に「記憶の時間」が近づいてくる。人は肉体的には死ぬけれども、生きている人々の心の中で相変わらず生き続ける。死者に対する心理的な死亡診断は徐々に進行される。心理的な死亡診断が下されるまで、私たちには「哀悼の時間」を必要とする。しかし、世越号の事件において、私たちは死体が見つかる前に、埋葬もする前に、火葬もする前に、すでに記憶を集めて貯蔵している。

人々があまりにも早く忘れるからであるという。だから記憶を失わないように、記憶貯蔵所を作り、記憶記念館を作るべきだという。しかし、「記憶の墓」が閉じられ、そして「記憶の規則」が定められ、「記憶の空間」が指定されると、それで私たちの哀悼は終わるのだろうか。はたして、記憶はこのように容易く物質化してしまうのだろうか。忘却と記憶はコインの表裏である。記憶は忘却の結果物である。生き残った者の立場からみて、死者に対する忘却がなければ、記憶は決して形成されない。しかし、全てを記憶するという、この発想の正体はいったい何だろう。世越号事件に対処する哀悼の方式は、現在、私たちの持っている「死の全て」を赤裸々に明かしてくれている。記憶だけでは哀悼は成り立たない。しかし、記憶すること以外に、何ができるというのか。現在の私たちにとって、死とは、このようなものである。

記録は記憶ではない。だから記録は「哀悼の不可能性」の告白かもしれない。モーリス・アルブヴァクス

は、歴史は「社会的記憶が薄くなったり壊れかけている時に」開始される、[5]という。社会的記憶の存続する限り、それを書き残すからといって、それが直ちに歴史となるわけではない。したがって、当代を記録することは、「歴史」ではなく、「史料」にすぎない。さらにアルヴァクスは、「まだ当代の集団記憶に居座っている過去のイメージを保存することに歴史が限られるのであれば、歴史は、現在の社会が関心を持っているものだけを保持することに他ならない」[6]という。彼によると、集団記憶は、決して人為的ではない継続的な思惟の流れであり、集団意識の中で生き残れる過去だけを保存するものである。

私たちは「世越号」から、全てのことを記録し、記憶しようとする集団衝動に出会った。「絶対記憶」を持つことだけが唯一の悼み方であるかのように思われた。しかし、社会的記憶は、集団の中で絶えず変わっていく。記憶は誕生し、成長し、消滅するものであるからだ。それゆえアルヴァクスは、いくら邪悪な意志や無関心でも、過去の出来事や人物を忘却させることはできない、[7]という。私たちは、社会的記憶は単数形に存在するのではなく、複数形に存在するものであることに留意すべきである。私たちは「世越号」に、一つの集団記憶だけを保存しようとする欲望、この独特な悼み方を見たのである。

三　罪悪感――「ごめんなさい」

ギルガメシュよ、あなたは思う存分食べなさい、
毎日の昼と夜を楽しみなさい。
毎日を歓喜の祭りにしなさい、
夜も昼も舞い遊びなさい。[8]

南スーダンに住んでいるディンカ族の司祭は、「銛の達人（master of the fishing-spear）」と呼ばれている。ディンカ族はかつて、老衰した「銛の達人」を土の中に「生き埋め」にしたりした。共同体全体の生命力を表象する「銛の達人」が、病気や事故のような偶発的要因によって死ぬわけにはいかなかった。もしそのようなことがあったら、それは大スキャンダルになるはずである。精巧に考案された儀式による自発的な「生き埋め」以外に、彼の死に方はあり得ない。そのようにして、ディンカ族は「銛の達人」の「死の時間」を支配しようとした。「銛の達人」は、殺害・自殺・死の混合の中で死んでいった。死、または死んでいくことが、ある種の葬儀を構成する場面を、ここに見ることができる。[9]「生き埋め」は、自殺と同様、「死の時間」を制御しようとする欲求から生まれる。だが、「銛の達人」の死は、共同体の人々を生かすための犠牲の行為として認識された。私たちは、世越号に乗っていた学生たちを見ながら、同じことを考えたのではないか。彼らの「生き埋め」により、まるで残った者たちの「生存の機会」が拡大されたような責務感が生まれたようだ。「ごめんなさい」を呪文のように唱えるようになった私たちの罪悪感は、こう始まった。

世越号沈没によって表わされた最も予期できなかった概念は、「生存者」という概念だったと思われる。実際、私たちの生はサバイバルゲームから成っている。人間は常に存在することを望むだけでなく、他の人がもはや存在していない場合でも、自分は存在したいと願うものである。人間の不滅性は、たかが他人より長く生き残るか、自分が死んでも我が名を永続させることくらいの意味でしかない。エリアス・カネッティのいうように、人々は「世界の誰よりも長く生き残ろうとする指向性」を持っているのかもしれない。[10]カネッティは「死を回避しようとする個人たちの努力が奇怪な権力構造を作り出した。一個人の生存のためには無数の死が必要だった。その結果もたらされた混乱を、歴史と呼ぶ」[11]という。実際、平和のように見える生の裏面は「生

存の闘争」で汚されている。ならば大事なのは、「生存の法則」を悟るということであろうか。

しかし、現代社会において、そうした生存の概念は適用されない。世越号に乗っていた誰もが、世越号だけの生存の法則を予測することはできなかった。生存の法則は時々刻々と変化し、また新たな生存の法則が次々に作られている。ゆえに、全ての生存の法則を知ることは不可能である。もはや「生存の時代」は終わっているようだ。数多くの変数を組み合わせて、わずかな生存の隙間をしばらく作っておくことにすぎない。私たちは、そうやって生きていく。世越号沈没の原因を完全究明したとしても、責任者全員を問責したとしても、私たちはまた別の世越号が沈没することを知っている。生存の法則が変わり続けているからである。ジークムント・バウマンはこういう。

> 結果的に、死は、絞首刑の執行人から刑務官に変わったのだ。必死性という巨大な死体が、頭から尾まで、怖いけれども治療できる（あるいは潜在的には治療できる）細い苦痛の小片に切り刻む。このピースは、生の隅々にぴったりはまるのである。もはや死は生の終わりから来るのではない。死は最初からここにいて、常に監視を要求し、一瞬の油断も許さない。私たちが働いて食べて愛を育み休む時に、死は見張っている（また死を凝視しなければならない）。数多くの代理物を介して、死は生を支配している。死と戦うことは無意味であり、死なせる「諸原因」と戦うこと自体が生の意味となる。[12]

おそらく私たちが世越号に見たのは、あえて目を背けた、こういった真実かもしれない。生活も国家も職場も愛も、全てが世越号そのものであるという、恐ろしい自覚が押し寄せてきた。だとすれば、この事態となった責任は誰が取るべきか。世越号沈没事件の「犯人」は誰であろうか。私たちは、乗客を放っておいて抜け出

した船長と船員たちを法廷に立たせた。彼らは現在、第一審で五年から三六年といった懲役刑を宣告された。世越号を不法に増・改築して惨事の原因を作った清海鎮海運は免許が取り消され、その代表には第一審で懲役一〇年が宣告された。清海鎮海運の実所有者と疑いをかけられた兪炳彦は変死体で発見された。海洋警察は解体された。そして世越号特別法の可決により、二〇一五年一月一日からは「世越号惨事特別調査委員会」が活動を開始する予定である。しかし、この一連の動きを見ていながらも、私たちは、つまるところ犯人は見つからないといった不安を抱いてしまう。おそらく最初からこの事件は、「犯人ナシに」始まっていたのかもしれない。

世越号沈没は、「司法判断」ではその原因を解明できない事件かもしれない。私たちは、世越号事件を通り過ぎながら、法と道徳との混乱、また宗教と法との混乱を目撃した。[13] 法と道徳と宗教が全て別々に動いている、という印象を受けた。「ごめんなさい」の呪文を生み出した「罪悪感」は、決して政治化されない空白、そうして司法的には解決されない空白を残したのである。突然、世越号沈没の観客になってしまった多くの人々は、わけの分からない罪悪感に苛まれた。ただし、この罪悪感は、「罪のない罪悪感」という点からして、すなわち自己誹謗の作り出した罪悪感という点で、カフカ的な罪悪感に近い。全ての人が、カフカの『訴訟』に出てくる主人公「ヨーゼフK」になったような気がした。人々は、自分には罪がないことをよく分かっていながら、自分の罪を非難し始めた。おそらく人々は「自分のみが自分を非難できること」を分かっていた。ならば、それは法の前では自分が無罪であることを意味するのではないか。なぜ、人々は世越号の前で集団的に「宗教的罪悪感」の幻想に陥ってしまったのか。「ごめんなさい」という言葉は、実は非常に宗教的な呪文ではなかったのか。[14]

世越号沈没事故において、神が登場する場面を探すことは容易ではない。宗教にできることは、ただ薦度齋

（チョンドジェ：死者の極楽往生を願う仏教儀式）や慰霊祭を行うことしかないように思われた。死の問題において、宗教は死後の「魂」を管理すること以外に、特に役割がないようである。私たちの宗教は現在、死に関して何もなす術がないのだ。死にかかわる全ての慰労は、宗教の外で、儀礼の外でなされているのではないか。儀礼と祭祀は、ただ魂の存在に対する物理的証明としてしか存在しないようである。「ごめんなさい」の含意する罪悪感から、「道徳的罪悪感」を語ることもできるだろう。今までの私の利己心や不道徳や無責任が目に見えない連鎖作用をして世越号を沈没させたとも思える。それなら、私と無関係な死というのがあり得るのか。死にかかわる私たちの言葉が、すでにそこまで緩んでしまったのではないか。

世越号の犠牲者たちの遺体が陸に上がってくるたびに、人々は「ごめんなさい」を叫びながら罪悪感に包まれた。「生き残った者の悲しみ」のような罪悪感であった。今まで私たちが意図的に見過ごしてきた世の中の悪によって死んでいく「罪なき者たち」を見つめながら、私たちは「犠牲者のメカニズム」に監禁されざるを得なかった。なぜ死ななければならないのかを知らない犠牲者を世越号に乗せて沈没させながら、私たちは、世の中の悪が世越号と共に沈むことを願っていたのかもしれない。しかし、世越号は、これ以上「犠牲者メカニズム」が働かない事実を証明した。世越号を介して、むしろ私たちは最も生々しい「死の顔」に出くわしてしまったからである。私たちは皆いつでも沈没可能性のある「潜在的な犠牲者」となってしまったからである。

四　哀悼――韓国社会で「死ぬこと」の無意味

全てを見た者……

彼は隠されていたことを見たし、明かされていなかったことを発見した……

〔彼は〕脱力したまま、安らかに、長い旅を終えた。[15]

西アフリカのロダガア族は、死別の悲しみをコントロールするために非常に奇妙な儀礼を行う。たとえば、男性が死ぬと、彼の父と母と妻の手首を布で包んで皮紐で結ぶ。兄弟姉妹の場合は腰や手首を簡単に切れる繊維の紐で結ぶ。息子や娘は足首を糸で結ぶ。そして、この紐や糸の端は別の人が握る。これは死者と最も近い者が悲しみに耐えられず自傷や自殺をしてしまうことを防ぐためである。紐の材質と強度は彼らの悲しみの量を表象する。[16] 死の悲しみが物事を介して、このように物質的に可視化かつ階層化するのである。また、レナート・ロザルドは、フィリピンのイロンゴット族が死別の悲しみによる怒りを発散するため、どのように「首狩り」に出るのかを分析した。[17] 死の悲しみは、他人の首を切らずにはいられないほどの強烈な怒りを引き起こすこともある。彼らは「切られた首」を以って自分の哀悼を物質化した。このように、葬儀には哀悼の階層化や物質化を調整し配置する役割がある。

世越号沈没事故における死の中心は、溺死体から記憶貯蔵所へ、また世越号特別法へ、素早く移った。私たちは「忘れません」と繰り返しながら「ごめんなさい」といった。ところが、不思議なことに、これらの全過程において、「死」は次第に薄れていった。それは、おそらく「死の表象」が沈んだ世越号の船内に閉じ込められず、私たちの生のあらゆる空間に希薄に拡散してしまったせいかもしれない。世越号の死の表象は、沈没する船から溺死体へ、またあらゆるものの象徴的な死へ、さらに皆の猶予された死へ、と成長し続けていた。そして、その表象の成長は、生の空間が死の空間であるとの認識に、もう立ち止っているように思える。本稿では、韓国の災害の歴史を述べる紙面がない。だが、少なくとも世越号が韓国災害史における死の表象を完結しているとはいえる。これまで述べてきてたどり着いた結論は、韓国社会で「死ぬこと」の無意味くらいでは

ないか。意味を問う解釈の枠組みが、全部沈没してしまったからである。本稿は、世越号の象徴からだんだん消えている「死の痕跡」を取り戻そうと試みたものである。私たちは今なお「世越号」から死を読めずにいる。

世越号の沈没過程は、まるで（埋葬の際の）「下棺式」のようであった。三〇四人の遺体が入った長さ一四五メートル、幅二二メートルの世界最大の「鉄の棺」が海中へ下っていた。私たちはテレビ画面を通じて、三日間、葬儀を執り行っていた。そうして下棺が行われ、全てが終わった。死の現場がそのまま葬儀場になる、奇妙な場面が演出された。普通、人が死んだら一定の儀礼過程を経て埋葬される。しかし、世越号の沈没で、私たちは、死と葬儀との同時進行を経験した。埋葬を以って死ぬという、このようなことは非常に稀で例外的にのみ起こる。死そのものが儀礼となった、といえる。あるいは死んだ者がみずから自分の葬儀を行うことで、「残された者」が行うべき儀礼が消えてしまった、ともいえる。残された私たちは、何をすればいいのか。

世越号の沈没は、「生き埋め」の過程として読まれた。沈没と葬儀の同一性、すなわち、災害そのものが儀礼になる、不思議なことが起こったのである。したがって、その三日間、人々はすでにそれなりの方法で「各自の葬儀」に参加していた。その後に起こった物事、つまり、遺体の収容、火葬、葬儀、追悼行列は、すでに終わった儀礼を繰り返す「余剰的なこと」のように扱われた。言い換えれば、その後の全ての行為は、この三日間に起こった不可解なことを何とか理解しようとする注釈であった。この時から、人々は集団的な「生存者意識」に包まれた。船と共に「沈んだ者」と、船に乗っていない「生存者」との二分法が作動し始めた。世越号は「災害の現実性」ではなく、「災害の潜在性」といった構図で理解されていた。世越号は「私の災害」かもしれないが、間一髪で私が助かっただけだ、という意識が支配的だった。世越号は、いつどこでも、いかなるものを介してでも、再び顕現化し得る「死の怪物」を象徴していた。しかし、私たちの踏んでいるこの地上のデッキはいかに薄いものかを注意深く見つめる力が、私たちにはまだ残っているだろうか。韓国の生死学は、

まさに、この無意味の地点に立って出発し直すべきであろう。

■註

1 Jonathan Z. Smith, "Wisdom's Place," in John J. Collins & Michael Fishbane, eds., *Death, Ecstasy, and Other Worldly Journeys*, Albany: State University of New York, 1995, p. 9. ギルガメシュ叙事詩の中、エンキドの死後、ギルガメシュは自分の必死性を自覚する。

2 *Ibid.*, p. 3. ギルガメシュ叙事詩の中、「ギルガメシュと生者の土」において、ギルガメシュはウルクで人間の必滅性を目撃し、永遠の不朽の名声を得るために英雄的な冒険に旅立つ。

3 ユン・スンヒョン「世越号の記憶貯蔵所一号館」、『建築』五八巻一二号、二〇一四年一二月、二四〜二八頁。キム・イクハン、「古棧洞の共同体と記憶貯蔵所――下から世の中を眺める」、ソウル大学校人文学研究院HK文明研究事業団シンポジウム発表文、二〇一四年一〇月一七日。世越号の記憶貯蔵所に関しては、「四・一六記憶貯蔵所」のホームページを参照。http://archives.sa416.org

4 キム・イクハン「世越号の記憶貯蔵所を作ろう」、『歴史批評』一〇七号、二〇一四年夏、一二〜一三頁。

5 Maurice Halbwachs, *The Collative Memory*, trans. Francis J. Ditter, Jr. & Vida Yazdi Ditter, New York: Harper & Row, 1980, p. 78.

6 *Ibid.*, p. 80.

7 *Ibid.*, p. 82.

8 Jonathan Z. Smith, *op. cit.*, p. 9. ギルガメシュの話を聞いて、年老いた売春婦シドゥリが話す。

9 Godfrey Lienhardt, "Burial Alive," in Antonius C. G. M. Robben, ed., *Death, Mourning, and Burial: A Cross-Cultural Reader*, Malden: Blackwell Publishing, 2004, pp. 122-133.

10 Elias Canetti, *Crowds and Power*, trans. Carol Stewart, New York: Continuum, pp. 228-229.

11 Zygmunt Bauman, *Mortality, Immortality & Other Life Strategies*, Stanford: Stanford University Press, 1992, p. 35, note. 26.

12 *Ibid.*, p. 140.

13 Giorgio Agamben, *Remnants of Auschwitz: The Witness and the Archive*, trans. Daniel Heller-Roazen, Brooklyn: Zone Books, 1999, p. 24.

14 Giorgio Agamben, "K.," *Nudities*, trans. David Kishik & Stefan Pedatella, Stanford: Stanford University Press, 2011, pp. 20-36.

15 Jonathan Z. Smith, *op. cit.*, p. 12. 「この言葉は、後代にギルガメッシュ叙事詩に追加した編集者の言葉である。」

16 Jack Goody, "The Day of Death: Mourning the Dead," *Death, Property and the Ancestors: A Study of the Mortuary Customs of the Lodagaa of West Africa*, Stanford: Stanford University Press, 1962, pp. 87-88.

17 Renato Rosaldo, "Grief and a Headhunter's Rage," in Antonius C. G. M. Robben, ed., *op. cit.*, pp. 167-176.

（イ・チャンイク　翰林大学生死学研究所HK研究教授）
（イ・ブョン　韓国外国語大学非常勤講師）